

〔論文〕

# 現代工業社会が要求する道徳教育 — 砂漠風土に発生したキリスト教の考察から —

稲井 廣吉\*

## — 目 次 —

1. 研究意図
  2. 高温乾燥の砂漠風土と高温湿潤のモンスーン風土における住民の心理と宗教の特徴
  3. 風土から見た日本の教育のあり方
- あとがき

キーワード：現代工業社会は砂漠風土的性格を持っている。明治のフランス型教育改革の継続発展が、平成教育改革の課題である。

## 1. 研究意図

筆者は昨年12月、この『論集』の121号に「教育危機打開の方策に関する一考察」というテーマの論文を発表した。その中で日本の今日の教育危機の根本原因は、明治の教育近代化政策の際に西欧教育の知育面であるヒューマニズムの教育のみを取り入れ、徳育面を分担するキリスト教の教育の方を疎外して、明治の教育改革以来一世紀以上を知育の近代化オンリーの片足歩行の教育を続けてきたところに根本原因があることについて述べた。その理由として、修身、社会科、道徳の時間等で行う世俗的なヒューマニズムの道徳教育は、キリスト教の道徳教育

---

\* Hiroyoshi INAI 香川大学名誉教授、元四国学院大学教授、教育学博士

にくらべて、その道徳基準が外面的であること、犯罪非行に対する抑止力が劣ること等を指摘した。読者の中には、理論としては分かるが、何分にもキリスト教は、徳川幕府によって長く禁止されていた宗教である上に、日本の風土とは全く異なる砂漠風土の中から生まれた宗教であるので、エキゾチックなところが多くて、自分たちの肌に合わないところが少なくない。そのため近づきにくいと言う者も居られると思われる。本稿はそうした事情を配慮して、改めて「風土」の観点から日本の今日の教育危機の根本的原因を捉え直して、キリスト教による道徳教育の必要性をわかりやすく解説した論文である。

## 2. 高温乾燥の砂漠風土と高温湿潤のモンスーン風土における住民の心理と宗教の特徴

こうした問題についての研究は、筆者は幸いにも1978年12月発行の『論集』42号に、「教育の学際的研究（その3）—風土と人間形成—」というテーマの論文として既にまとめて発表している。その内容は、和辻哲郎氏、鈴木秀夫氏、山内得立氏等、その道の権威者たちの諸説に拠っているので、今日も通用する真理であることを確信している（文献に関しては、本稿最後の「参考文献」の項参照）。そんなわけで、本稿では、上掲の論文を拠り所として説明を行うことにしたい。

### (1) 風土の意味と類型

本稿における風土の概念は、和辻哲郎氏の用語に従ったものである。氏は、風土の概念と類型については次のような意味に用いている。

- ① 風土とは、ある土地の気候、気象、地質、地味、地形、景観など自然的環境の総称であって、人間との関係において考えられた自然環境である。
- ② 世界の風土は、対蹠的観点から大別すると、高温乾燥の砂漠風土（アフリカ、アラビア）と、高温湿潤で森林や水田の多いモンスーン風土（インド、東南アジア）とに大別される。

これらの相反する二つの風土類型における住民の心理と信仰する宗教の特質とを分かりやすく一覧表で示すと、第1表のようになる。以下この表を用いて、両

風土の住民における心理的特質の相違点を明らかにしたい。

第1表 高温乾燥風土とモンスーン風土における住民心理と宗教の比較

	高温乾燥風土	モンスーン風土
気 候	○高温乾燥（アフリカ、アラビア）	○高温湿潤（インド、日本）
景 観	○砂漠と草原（死の世界）	○森林と水田（生の世界）
住 民 心理的 特 徴	○遊牧民 ○孤独、主知的 ○命がけの敵対的、攻撃的態度 ○直線的、ロゴス的思考 （工業社会に適した心理）	○稲作農耕民 ○集团的、主情的 ○受容的、忍従的態度 ○曲線的、レンマ的思考 （稲作農業社会に適した心理）
信仰する 宗 教	○キリスト教、イスラム教	○ヒンズー教

高温乾燥風土というのは、年間の降水量が蒸発量よりも少ない乾いた地域である。このため植物が生育せず、砂漠の景観を呈した死の世界である。水が不足しているので、農業は行われぬ。住民は遊牧民であってアフリカやアラビアはその代表的な地域である。これに対してモンスーン風土は、まったく対蹠的な特徴を示している。モンスーンとは、赤道西風の北上によって起こる季節風のことである。とくに夏、熱帯の大洋から陸に向かって吹きつける季節風は多量の雨をもたらすので、モンスーン風土は暑熱と湿気との結合した高温湿潤な地域となる（夏は雨季、冬は乾季）。このためモンスーン地域は「森林に囲まれた農耕地」の景観を呈し、農業とくに稲作農業に従事する稲作農耕民が主たる住民となる。インド、東南アジアがその代表的な地域で、日本もこの風土類型に属している。

## (2) 風土と住民心理の特徴

### (a) 孤独で命がけの敵対的、攻撃的態度と、集团的、受容的、融和的、忍従的態度

乾燥風土の砂漠地帯では、植物も動物も生育しないで、自然はあたかも死の世

界である。こうした厳しい自然の中で生き抜いていくためには、人びとは自然に対しても人間に対しても生きるか死ぬかの思いで、敵対的、攻撃的態度で立ち向かわねば生きていけない。そうしない場合は、たちまち死がやってくるからである。砂漠民の歴史を見てもこの点は明らかで、砂漠の中の泉や草原は、常に命を賭しての争奪の場となってきた。筆者が砂漠風土のエジプトに旅行した1979年のことである。8月末に帰国して2ヶ月ぐらい経った休日にテレビのニュースを観ていると、エジプトのカイロで日本近世絵画展を開催していることが報道されていた。アナウンサーの説明によると、エジプト人の好みを考えて川中島の戦いのような昔の勇壮な軍記物の絵画を中心に展示したところ、非常な好評で、連日押すな押すなの盛況が続いているということであった。こうした点からも砂漠民の闘争的、攻撃的な性格の一端がうかがえた。カイロ郊外の砂漠の中にそびえ立つ四角錐の形をしたピラミッドは、砂漠に住む人びとのこうした敵対的、攻撃的な心理的態度を象徴していると言われている。その理由としては、第一に、自然は本来、不規則な曲線から成り立っているのに、ピラミッドは規則正しい人為的な直線から構成されていて、自然に対する人間の挑戦を象徴していること、第二に、直線は曲線とちがって攻撃的な性質をもった線であること等が挙げられる。これに対してインド、日本のような高温湿潤なモンスーン風土では、その蒸し暑さは不快感を伴いはするが、砂漠のような敵対的、攻撃的態度をよび起こさない。湿潤は、植物を繁茂させ農業を可能にし、自然の恵みをもたらす生の根源だからである。それと共に湿潤は、しばしば暴風雨、集中豪雨、洪水等をもたらすが、その自然力は余りにも強力で、人力では全く対抗できない。このためモンスーン風土の人びとの心理的態度は、敵対的、攻撃的な砂漠風土の住民とは逆に、受容的、忍従的、諦め的な心理が培われてくる。暴力の否定と不服従運動を基調とする無抵抗主義を唱え実践したマハートマ・ガンジーは、モンスーン風土の人間の典型と見なされる。

#### (b) 直線的なロゴスの思考型と曲線的なレンマの思考型

砂漠風土では、人は常に死と直面しているので、オアシスへの道は迂回が許されない。直線的に最短距離を進む必要がある。山内得立氏によれば、こうした風土的特質の影響を受けて、エジプト人の思考態度は直線的なロゴスの論理が基調

となっているという。ロゴスの論理とは「AはAである」という同一律と「Aは非Aではない」という矛盾律とをもとにして、物事を合理的、一元的に精密に考察する思考方法である。思考に知的精密さがないと、たちまち死がやってくる風土だからである。筆者もガイドに従って中に入り、自分の目で確かめたが、エジプトのピラミッドの内部には部屋やいくつもの回廊が設けられているのに、4500年も経過した今日においても崩壊しないでいるのは、ピラミッドが極めて精密で合理的ロゴス的に構築されているためである。砂漠の中では、一つの道がオアシスにいたる真の道であるかどうかは、生死に関わる問題である。このため真偽の区別をきびしく行うロゴスの論理の思考型が形成されてきたことが考えられるのである。このロゴスの思考型は、物事を合理的、一元的に考察する思考方法であるので、科学文明や工業生産の発達の原動力となるものである。エジプトと同じ乾燥風土型に属する西欧諸国がルネッサンス期を迎えて、ギリシャのプラトーンを中心としたヒューマンイズムの思想が復興するとともに、科学と工業が急速に進歩発達したのは、こうした砂漠のロゴスの思考方法を受け継いで駆使したためであると考えられるのである。

これに対してモンスーン風土では、山内得立氏によると、物事を合理的に考えるロゴスの論理とは違ったレンマの論理の思考型が発達するという。レンマとは「直観的につかむ」ことを意味する。したがってレンマの論理では、ロゴスの論理の場合とちがって「Aでもなく非Aでもなく、又Aでもあり非Aでもある」というように論理的判断を中止して全体的、非合理的に直観する総合的な直観方法をとる。このような思考型に対しては、モンスーン風土の森林環境の影響が考えられる。森林の中では砂漠とちがって至る所に生が充満していて、砂漠のような死の空間が存在しない。直線的か曲線的かを問わず、どの道を行っても生に連なり、死を招くことがない。それでいてどの道も完全な生を与えない。その結果、大ざっぱで非合理的、総合的に思考するレンマの思考型が形成されてきたことが考えられるという。

以上の説明から明らかなように、モンスーン風土の住民の思考型からは、科学やその応用である工業生産は生まれにくいし発達もしない。インドを始めとしてモンスーン風土に属する東南アジアの諸国においては、第二次大戦前までは、科学や工業の発達が西欧諸国にくらべて大きな遅れを見せていた。このことは、モン

スーン風土の影響の大きさを示すものといえるのである。

ただここで注意すべきことは、高温乾燥の砂漠風土がもたらす科学の発達や工業的文明社会の形成は、便利で豊かな社会を形成する点で、人類に大きな福祉をもたらしてはいるが、その反面、砂漠風土と同様に、死の社会的環境をももたらしていることを看過してはならない。これまでの叙述で明らかなように、ロゴス的思考を基調とした工業がもたらす文明社会は、砂漠風土の住民の命がけの敵対的、攻撃的態度を基盤にしたロゴスの論理の思考型から産み出されたものである。それゆえ文明社会の合理的な社会環境は、一面においては砂漠風土と同質な死の環境を形成し、そこに生活する人びとの心理は、砂漠風土の住民と同様に、孤独で理性的である。そして他人に対する心理的態度は、無意識のうちに敵対的、攻撃的で、相手の立場や心情を考えずにすぐ生死を賭した直線的思考態度で立ち向かう傾向を持つといえる。ここまで考察を深めてくると、近年日本の高度な工業社会で頻発し、識者を憂慮させている、子ども達による多くの事件の諸原因の手がかりが得られるのである。すなわち、経済的に豊かで知育に熱心な家庭において、受験勉強でロゴス的思考力の鍛えられつつある中高生達により引き起こされる父母や祖父母に対する殺傷事件の発生原因が、初めて理解されてくるのである。彼らにとっては、愛情に乏しく知育に偏った、あるいは知育のみを強要するといえるような家庭は、砂漠風土とまったく同質の環境なのである。そこでの親や祖父母の知育本位の言動に対しては、ちょっとしたことにも敵意を抱き、生きるか死ぬかの思いとなって直線的に攻撃してしまうのではなからうか。戦前の日本の農村社会中心の時代には、この種の事件は皆無であった。戦後工業が急速に発達して工業化、都市化が進行し、社会がロゴス的で知性の高い高学歴社会へと発展してきてから、突如として頻発するようになってきた。家庭が経済的に豊かになり親の教養も高くなっていけば、これまでの教育常識としては、この種の事件は発生しないと考えがちであった。それが、なくなればいいばかりか、殺傷した母親の首をバッグに入れて交番に出頭する等、むしろ敵視化や残虐化が強まる傾向さえ見せている。実は、この種の事件が経済的に豊かになり文明と教育の発達した今日の社会になぜ頻発し、なぜなくならないのかについては、筆者自身もこれまで納得のいく解答が見出せなかった。本稿の執筆を始めて、風土と住民心理との関係に着眼するようになってから、初めてその発生理由らしきものが理解できる

ようになった次第である。この種の事件が工業化の進んだ大都市中心に発生していること、受験勉強に熱中してロゴスの思考をフルに鍛えられている時期の中高生によって引き起こされていること、ロゴスの知育重視の教養ある家庭において頻発していること等を合わせ考えても、その発生原因が上述のように推測されるのである。今日の社会や家庭が、日本の工業化の進展と共にいつしかロゴス重視の砂漠風土のような環境になっており、その影響を受けて、子どもの方も親から叱られるとすぐ生きるか死ぬかの思いとなって敵対的、攻撃的態度でそれを受け止め、直線的に反応するのである。その結果が動物にも劣るようなあのような事件となって現れるのだと思われる。最近、親が子どもを虐待したり殺傷したりする事件が頻発しているが、これらについても同様で、工業化による社会や家庭環境の砂漠化が原因と考えられるのである。

### (3) 風土と発生した宗教の特質

#### (a) 砂漠風土に発生したキリスト教

第1表の中の「信仰する宗教」の項目では、モンスーン風土の場合の具体例としてヒンズー教を挙げているのは問題ないが、高温乾燥風土の例としては、イスラム教でなくてキリスト教を挙げている。これについては特に説明を加えておく必要がある。本稿では、高温乾燥風土の典型的宗教をキリスト教にしているのであるが、その理由は次の事情による。

①第一の理由としては、前の『論集』121号の筆者の論文「教育危機打開の方策に関する一考察」においても強調しているように、日本の今日の教育危機の根本原因は次の点にあると考えているからである。明治維新の教育改革の際に、日本は英、独、仏等の西欧諸国の教育をモデルにしなが、知育面の自己中心主義的なヒューマニズムの教育のみを採り入れ、徳育面の神と隣人を愛するキリスト教の利他主義の教育を採り入れなかったところに、最大の原因があると考えているのである。日本の今日の工業化社会における教育改革のあり方の考察を旨とする本稿では、イスラム教よりも、工業の発達した西欧国民が信奉するキリスト教の方が重要な意味を持っているからである。

②次の理由としては、キリスト教もまた高温乾燥のアフリカとアラビアの砂漠

風土から生まれた宗教だからである。キリスト教の母体であるユダヤ教を創始したヘブライ民族もまた、エジプト人の奴隷としてアフリカのナイル川流域に既に紀元前19世紀の頃から住んでいて、煉瓦造りを業としながら苦難の生活を続けていた。紀元前14世紀の頃には、ユダヤ教の指導者モーゼに率いられてエジプトを脱出し、新たに入植したのは地中海東岸のアラビア砂漠のカナンの地であった。ところがこのカナンの地もまた高温乾燥の砂漠風土で、多くの小都市国家が乱立して互いに争っていた。紀元27年にはイエスの公生涯が始まり、その刑死復活の6週間後には、イエスは全世界にこの教えを述べ伝えるよう弟子達に指示して去っていった。パウロを筆頭に弟子達は、シリアのアンテオケをキリスト教会の布教基地として、地中海沿岸のアジアはもとよりギリシャ、ローマ等ヨーロッパの諸国までも布教活動を行った。特にプラトンに代表されるギリシャ哲学を中心とする西欧のヒューマニズム系の学問の発祥地であるギリシャのアテネがキリスト教教会の中心基地ともなったことは、後に西欧の教育思想がヒューマニズムの教育とキリスト教の教育との二大教育思潮を教育の基軸とするようになったことと深く関係していると思われる。

### (b) キリスト教は砂漠住民が抱く価値観に基づいて発生した宗教

前にも述べたように、砂漠人が住んでいる自然は、動物はもとより一木一草もない死の世界である。しかも住んでいる人びとの心理は生来ロゴス的で、情緒に乏しい上に相互に攻撃的、敵対的であるので、モンスーン風土に住む我々には想像を絶するような淋しい孤独な生活の毎日である。人間は自己を統御する何ものかを持たない限り、自己を統御することは難しい存在である。日が沈んで夜ともなると、砂漠はまったくの「死せる静寂」そのものの環境となり、孤独感はさらに倍加してくる。こうした死の環境の中にあっては、空にきらめく星だけが、砂漠を旅する遊牧民にとっては生き生きとした生の躍動感を覚えさせてくれるものなのである。かくして遊牧民は、天空にこの天地と人間を造られた絶対者としての人格神の存在を求め、それに縋ることで、日頃から心の中に抱いている価値観の充足を願うようになる。こうして発生したのが、ユダヤ教を母体として生まれたキリスト教であると考えられるのである。このためキリスト教の戒律は、砂漠民固有の心理上の欠陥を是正し長所を伸ばすことによって、その文化と社会とを

健全に発達させるための道徳律や生活指針から成り立っている。

キリスト教が砂漠民と西欧人に与えた主な生活原理は、次の二点である。理解しやすくするために、高温湿潤なモンスーン風土の場合と比較しながら説明を行うことにしたい。

キリスト教が西欧人に与えた生活原理の第一点は、個人主義の生活原理である。砂漠風土という死の環境の中であって、元来知的、ロゴス的で情に乏しく、相互に攻撃的、敵対的な人間関係の中で成長する砂漠民の本性は、モンスーン風土において情緒的で暖かい集団主義の社会で保護されて育った稲作農耕民などには想像もつかないような、厳しい孤独な生活の毎日である。キリスト教の絶対神は、この孤独な砂漠民の招きによって心の中に内在し、友となって孤独な生活を慰めると共に、人生の苦難に際しては導きの師となって指導し援助してくれさえする。その結果、西欧人はキリスト教の信仰によって、集団中心の稲作農耕民の場合と次の諸点で違った特徴を持つようになってくる。

一つの特徴は、各個人の中に神が内在するので個人を尊重し、集団以上の価値を持ったものとして個人を究極の目的とさえ考える思想である。但しこの場合、普遍的価値の客観化された集団や国家への奉仕とは矛盾しないことはいうまでもない。キリスト教の信仰を持ったことによって、西欧人が身につけた二つめの特徴は、各個人が絶対の世界と相対の世界の両方にまたがって生きることになったことである。前者を律する道徳は教会の道徳であり、後者を律する道徳は世俗の道徳である。具体例を挙げると、投票行動のような場合は国家、社会の重要な事項なので、西欧人の場合は、血縁、地縁や個人的利害関係のような相対的な世俗の道徳を排除して、教会で学ぶ絶対的道徳の立場で行うことになる。西尾幹二氏が述べているように、信仰心の影響によって西欧では、今日の日本に起きているような、相対的なものを絶対化するような事件は生じないという。報道によれば、昨年日本のA県では、県知事の私的依頼を県の三役の一人が「天の声」（絶対者の声）と称して絶対化し、関係者に影響を及ぼして「官製談合」が行われたということである。この事例のように集団主義の稲作農耕社会の風習では、時には自己のエゴの追求のために所属集団の上司の命令を絶対者の声と解して、部下を督励するようなことが起こりがちである。三つめの特徴は、個の確立ということである。各個人には絶対者が内在しているから、自己が強靱で孤独になることを恐

れない。自己主張が強く、自分の納得しないことにはガンとして応諾せず、yesとnoが極めて明確である。これに対して集団主義の稲作農耕民の場合は、個人の抱く道理や主張よりも集団の和を重視するので、集団から離れて独りになることをひどく怖れる。そのためyesとnoが曖昧で、境をボカす傾向が強い。

キリスト教が西欧人に与えた生活原理の第二点は、隣人愛の生活原理である。既述のように砂漠風土の住民から出発した西欧人は、元来知的、理性的で情に乏しい上に相互に生死を賭した敵対関係にあるので、そのままでは家庭や社会は形成できない人びとである。こうした砂漠住民に対して、生きていくための二つめの生活原理を与えたのが、「己のごとく汝の隣りを愛せよ」という誠めである。キリスト教ではこの誠めを非常に重んじていて、神を愛することの具体化として命じているほどである。それゆえ自分に好意を寄せる者だけを愛するのではなくて、敵をも愛によって隣人に変えていくような高度な愛が求められているのである。高温乾燥の砂漠住民の生来の欠陥である命がけの敵対心も、人びとがこうした戒律を持つキリスト教を信仰することによって次第に失われていったのである。

### 3. 風土から見た日本の教育のあり方

#### (1) 西欧の風土と二大教育思潮

乾燥風土型に属する西欧諸国の人びとは、元々砂漠民に類する心理的特徴を持っていて、孤独で自己中心的でロゴスの思考力に富む反面、他人に対しては敵対的、攻撃的態度で臨み、すぐキレて生きるか死ぬかの思いで直線的に行動する心理的傾向を持って生まれてきている。このため西欧の教育は、一方では生来の長所であるロゴスの思考力を伸ばす必要があると共に、他方では孤独で自己中心的な性格や命がけの敵対性や短気等の欠陥を是正して、理想の人間にまで形成していくことが必要である。そうした事情から西欧の教育は、古代から専ら長所として保持してきたロゴスの思考力を伸ばすための世俗的なヒューマニズムの教育（知育）と、生来の心理上の欠陥を是正して人格を完成させるためのキリスト教の教育（徳育）との、二つの教育思潮から成り立っているのである。西欧の教育史を通じて一貫して行われてきているのが、この二大教育思潮による教育である。

これら二つの教育思潮のうち、ヒューマニズムの教育の方は、古代ではギリシャにおいてプラトンの哲学を中心に行われた。その後中世を経てルネッサンス期を迎えると共に、ギリシャのヒューマニズムの教育が復活し、理性を重視するカントの理想主義の哲学となった。カントが重視した理性は、近世の進展と共に科学技術の発達を促して産業革命をもたらした。20世紀に入ると、西欧はついに工業的文明社会の様相を呈するに至った。工業社会は、元来砂漠民特有の心理的特徴であるロゴスの論理的知識を中心に発達した社会であるので、便利で快適な生活をもたらした反面、砂漠住民が生来具備する孤独で人情に乏しくて相互に敵視し、欲求不満が生じた場合にはすぐ命を賭して直線的に行動するような心理的欠陥を持つ人びとから成る社会でもあった。英、独、仏を始めとする西欧諸国は工業化社会への発展のただ中であつたが、古来の教育的伝統に従つて一方では、工業発達のためにヒューマニズムの教育（知育）を重視すると共に、他方では、情意の面で国民の砂漠民化を防止するためにキリスト教による道徳教育に力を注いだのであつた。

明治維新に際して断行された日本の教育近代化政策では、上記のような西欧の教育体制をモデルにしながら、知育面のヒューマニズムの教育のみを採り入れ、徳育面のキリスト教の教育は国内の諸事情のため除外して、世俗的な道徳教育で代用して今日に至っているのが実情である。いわば西欧の教育が2,000年前からヒューマニズムの教育（知育）とキリスト教の教育（徳育）との2足歩行の教育を続けてきているのに、日本の教育は、明治5年（1872）の教育改革以来、ヒューマニズムの教育（知育）オンリーの片足歩行の教育を続けてきているのである。こうした点に目を向けただけでも、日本の今日の教育体制が大きな欠陥を抱えていることが推測されるのである。

それにしてもヒューマニズム教育による知育を採り入れただけでも、日本にとっては大きなプラス面があつたことを看過してはならないと思う。明治以来、学校で近代的なロゴスの知育が教授されたことによって、第二次大戦後には、日本の社会の工業化が急速に進展して経済が高度に成長し、世界第二の経済大国にまでなつたのであつた。さらに今日では自動車工業のごときは、本場のアメリカをも凌駕するほどの勢いで、世界でも屈指の工業国となっている現状である。私たちが今日、便利で豊かで快適な生活を享受することができるのも、ひとえに明治の

先人たちが、西欧のヒューマンイズムの教育を採り入れ、知育に力を注いで教育近代化政策を推し進めたお陰であると言わねばならない。

## (2) 日本の現代工業化社会の風土的性格と道德教育のあり方

### (a) 現代工業化社会の風土的性格とフランス型教育方式の継続発展

これまでも述べたように、工業化社会は風土的には砂漠民の特徴であるロゴスの論理の思考力が基盤となって形成された社会である。従って工業化社会では、砂漠民の心理上の欠陥である孤独性、自己中心性、命がけの敵対性、直線的行動性等を要因とした諸事件もまた発生しがちな社会でもある。最近になって、モンスーン風土の稲作農耕社会の時代には全く見られなかったような中高生による父母や祖父母に対する殺傷事件が頻発するのは、今日の社会が風土的には、従来のモンスーン風土的性格の社会から、既に砂漠風土的性格の社会へと変化してきていることを立証しているといえよう。従ってこの種の事件の発生を食い止めるための道德教育は、もはや稲作農耕社会時代に重視された儒教道德のようなタテの道德であってはならない。砂漠風土的性格を持つ西欧諸国と同様に、キリスト教の道德教育に依らねば、この種の事件の発生を根本から食い止めることは不可能である。

明治の教育改革に際して日本がモデルにした西欧の教育は、既述のようにヒューマンイズムの教育（知育）とキリスト教の教育（徳育）とから成り立っていたが、後者の実施の仕方については、同じ西欧でも国によって大きな相違が存在していた。英、独ではキリスト教の道德教育を学校教育においても強力に実施していたが、フランスでは、平塚益徳氏が述べているように、公立の学校から宗教を除外して、道德教育は世俗的道德を教える修身と公民科だけで行われている実情であった。なぜ重要な宗教による道德教育を除外したかということ、フランスでは当時カトリックとプロテスタントとの間に相当深刻な争いがあったことが最大の理由であったようである。このためフランスでは、宗教教育を英、独のように公立の学校教育では行わず、家庭と社会と私立学校に任せることになったということである。フランスもまた他の西欧諸国と同様に、キリスト教教育の重要性を十分に認識していたので、そのために学校の授業は、日曜日のほかに水曜日も休みとし、

当日は各自が所属している教会の行事に出席させて、教会で宗教的道徳教育を受けさせている。

明治の先覚者たちが日本の教育の近代化に当たって先ずモデルとして着眼したのが西欧の教育であった。西欧の教育は、当時もヒューマンイズムの教育（知育）とキリスト教の宗教教育（徳育）とから成り立っていたが、その実施の仕方は上述のように、宗教教育の実施の仕方において、英、独の方式とフランスの方式とでは違いがあったのである。明治の先覚者たちは、当時の日本の社会の宗教事情から、学校教育はヒューマンイズムの教育のみを行うフランス方式を採用し、宗教教育については、後代の課題として残した形となっている。学制頒布が行われた明治5年（1872）にはまだ徳川時代の禁教令が生きていた時期であるので、新政府がフランス方式を採用したのは、今から考えても至極妥当なことと思われる。

これまで述べてきたように、日本の現代社会が風土的には既に砂漠社会となっているので、西欧と同様にヒューマンイズムの教育（知育）とキリスト教教育（徳育）の両者が必要であり、しかも日本国民の信仰する宗教が多様な現状においては、明治の先覚者たちが行ったと同様に今日においても、西欧の教育をモデルとしてフランスの教育方式を継続するほかないと思われる。しかしそれだけでは日本の教育の発展はあり得ない。今日、われわれが強く希望するのは、日本の教育の今後の目覚ましい発展である。明治の教育改革に際して採用したフランス方式を今回の平成の改革においても継承しながら、いかにすれば今後の日本の教育を発展させることができるかが、今日のわれわれに与えられている課題なのではなからうか。

ここでわれわれは、一つの重要な事柄に気づかされる。それは、フランス方式が英、独方式とその実施の仕方に違いはあっても、キリスト教の教育については英、独に劣らず重視し、家庭や社会や私立学校で強力に実施して今日に至っていることである。これに反して日本では、明治の教育近代化に際してフランス方式を採用しながらも、今日まで実施したのは学校教育で行っている知育についての改革のみで、家庭や社会で行う重要なキリスト教による徳育については、フランスとは大きな相違があったことは周知の通りである。従ってこの度の平成の教育改革ではそうしたことのないよう、何よりも先ず日本の教育におけるキリスト教教育の重要性を十分に認識してかかることが最重要事であると思われる。この点

について重ねてここで要約して述べてみると、次のようになる。

第一点は、日本の現代社会は工業化が著しく進行していて、風土的には砂漠風土的社会となっているので、西欧諸国と同様に砂漠風土に発生したキリスト教による道德教育が必須であることである。

第二点は、日本は第二次大戦に参加して曾てない痛手を受けただけでなく、連合国始め近隣諸国に対しても大きな迷惑をかけたという事実から、このことを心から反省し、戦争の防止については世界の先頭に立って何らかの形で貢献すべき使命を担っているという点である。これに関連して想起されるのは、戦争の防止に関するユネスコの宣言である。ユネスコは第二次世界大戦の勃発を教育的に反省して、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と宣言し、1965年に世界共通の目標として生涯教育（生涯学習）の教育目標を提示したのであった。

そしてこの共通目標の中核には道德的な「慈(いつく)しみの精神」を据えたのであった。愛の宗教といわれているキリスト教の道德教育を強力に推進することによって、日本人もまたユネスコの提唱する生涯教育に参加して戦争の防止に貢献し第二次大戦の罪を償っていくべきである。

第三点は、今日世界を動かしている自由、平等、人類愛、民主主義、人権等の概念や思想は、その殆どがキリスト教を母胎として生まれてきたものである。日本が今後世界の先進国として指導的役割を担っていくには、国民がキリスト教信者であることは、有利な条件の一つとなるはずである。

第四点は、キリスト教に対する日本人の感情や意識は、平成の今日においては、明治の教育改革の頃とは非常に違ってきている。明治期の試練の時代や第二次大戦期の受難の時代を経て、平成の今日初めて信教の真に自由な時期を迎えている。キリストの降誕を祝う祭日のクリスマス等は、最近では国民的行事のような趣を呈してきているほどである。

## (b) 道德教育のこれからの進め方

今回の教育改革もフランス型教育方式を採用し継続する以上、道德教育の進め方は、家庭、社会、私立学校の三者に依存することになってくる。これら三者の中で日本の現状がフランスと一番違っている点は、家庭のキリスト教教育化の点

である。日本のこれまでの道徳教育を革新していくには、家庭の父母のキリスト教教育化に先ず力を注ぐことが必要である。親が変われば子が変わり、子が変われば家庭全体が変わっていく。家庭は社会の単位であるから、各家庭が変わっていけば社会の風潮が変わり、社会全体が良い方に変わっていく。親と社会の風潮が変わっていけば、今日憂慮されている家庭崩壊や学級崩壊もなくなり、子どもは学業に専念でき、学力は自然に高まっていくであろう。これまでに述べてきたように、今日の工業化の社会では、家庭生活まで砂漠風土化している状況である。しかも知育本位の家庭教育は、家庭の砂漠化を強めていくだけであることを親は反省する必要がある。これを根本から矯正する力のあるのは、キリスト教の道徳教育だけである。

以上のように、今日の日本においては家庭教育のキリスト教教育化が不可欠であるのだが、これを進めていく際に注意すべきことがある。一つは、急がず時間をかけて行うべきであり、二つは、上からの強制は避けるべきで、各家庭の自覚をどこまでも待つということである。三つは、各家庭の自覚を促し、指導の先頭に立つべきものは、平成の教育改革では、フランスと同様に、教会とキリスト教主義の私立学校それ自体でなければならない。知育を中心とした明治の教育改革が短期間で効果をもたらし、西欧以上に工業化を進めることができたような優れた能力を持つ国民である。道徳教育の改革を中心とするこの度の平成の教育改革でも、西欧の道徳水準まで意外に早く到達するのではなかろうか。

## あとがき

筆者は昨年12月発行の論集121号に、「教育危機打開の方策に関する一考察」というテーマの論文を発表したが、本稿はその姉妹編として執筆したものである。実は、筆者が老骨の身で執筆を計画している論文はもう一つあって、テーマは「香川の風土と宗教、これからの教育」を予定している。ただこの論文は、高齢のため（現在96歳10ヶ月）未完成で終わるかもしれないと思っている次第である。

高齢の身で執筆を思い立った主な理由は、次の三つである。一つは、所属教会の雰囲気からである。筆者が所属する高松新生教会は、西原孝至牧師ご夫妻の熱心なご指導と三好一弘、大浦一臣両役員の方の率先垂範のもと、各会員がそれぞれ

に与えられた自分の個性を発揮して、奉仕作業に励んでいる傾向が顕著である。こうした教会の空気に刺激されたことが第一の動機である。二つは、やがてこの世から去っていく私たち老年者の切なる願いからである。最近、家庭や社会の崩壊を思わせるような深刻な事件が頻発し、日本の将来に夢が持てなくなってきた。私たち老年者としては、私たちが去った後もこれまでのように世界の先進国の一つとしていつまでも発展してもらいたいのである。三つは、筆者自身が四国学院大学に勤務してヒューマニズムの教育とキリスト教の教育との二つの教育を十数年間実践した経験を持っている。この貴重な経験を生かして、愛する日本に対して最後のご奉公をしておきたいためである。

終わりに、『論集』への寄稿についていろいろと仲介の労を取って下さった三好一弘氏（元四国学院大学法人事務部長、現高松新生教会役員）及び掲載についてご快諾下さった文化学会会長の池内功教授（四国学院大学論集発行責任者）に深く謝意を表する次第である。また本稿の執筆を予告した1年前から、その完成を待望してくれていた香川大学及び四国学院大学稲井ゼミの卒業生の方々（川田豊弘氏を会長とする稲穂会のメンバー）の励ましがなかったら恐らく未完成のまままで終わったであろうと思われ、併せて謝意を表しておきたい。文章の修正とパソコン入力は娘の池田邦子が引き受けてくれたことを最後に記して、あとがきとさせていただきます。

2007年10月10日

## 参考文献

- (1) 篠田雄次郎『日本人とドイツ人』光文社、1998。
- (2) 鈴木秀夫、『風土の構造』大明堂、1975。
- (3) 鈴木秀夫、『超越者と風土』大明堂、1976。
- (4) 鈴木秀夫、『森林の思考、砂漠の思考』NHKブックス、1978。
- (5) 土屋忠雄『概説近代教育史』川島書店、1967。
- (6) 西尾幹二、『ヨーロッパの個人主義』講談現代新書、1969。
- (7) 『平塚益徳講演集Ⅰ～Ⅲ』教育開発研究所、1984。

- (8) 『平塚益徳著作集 I～V』 教育開発研究所、1985。
- (9) 藤代泰三 『キリスト教史』 YMCA出版、1978。
- (10) 山内得立、『ロゴスとレンマ』 岩波書店、1974。
- (11) 和辻哲郎「凡土」『和辻哲郎全集』 第8巻、1962。